はじめての文字学習

～読み書きが苦手なのには訳（わけ）がある～

長野県総合教育センター

生徒指導・特別支援教育部

専門主事　堀内　澄恵

はじめに

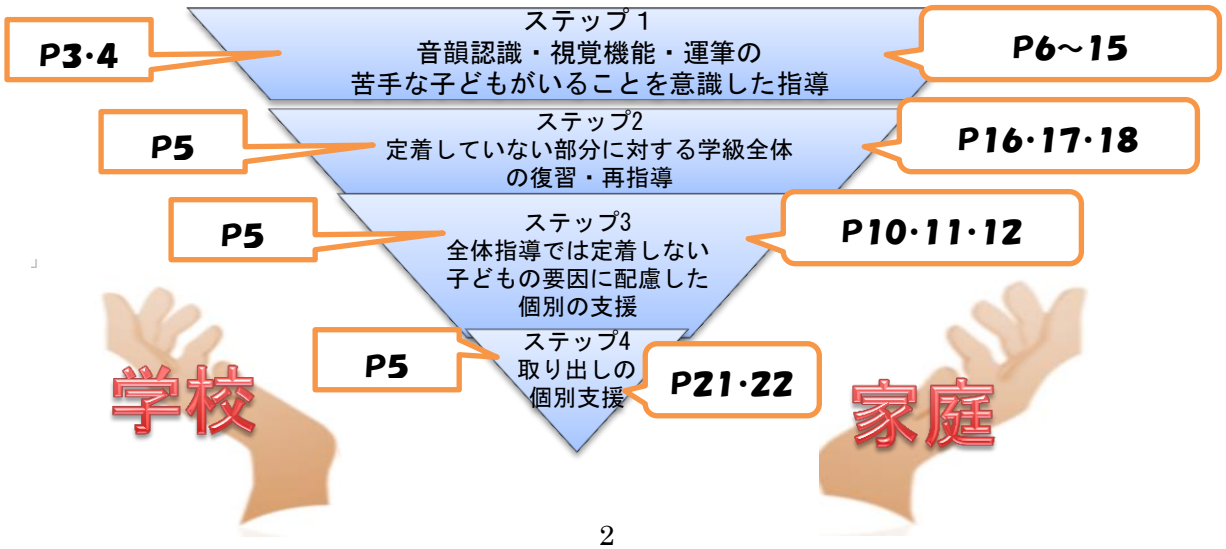
小学校１学年は、ひらがな，カタカナ，漢字を初めて正式に学ぶ大切な時期です。しかし，同じ１年生でも，４月生まれと３月生まれでは生活年齢の面で１割以上差があり、発達の面での差が学習面に影響が表れやすい時期でもあります。

また、文字についての経験にも大きな差があり，入学前から文字に興味がありひらがなの読み書きが苦もなくできる子どももいれば，文字に対して全く興味がなくほとんどの文字の読み書きができず，鉛筆で字を書いた経験が乏しい子どももいます。

このように小学校１学年には差が大きい子どもたちがいるということに，教師があまり意識を向けずに指導をすると，子どもたちが文字の読み書きの習得が十分できなかったり，学習への苦手意識を持ってしまったりすることがあります。

１学年におけるひらがなの読み書きの困難さは、全ての教科の学習に影響します。教科書が読めなかったり問題文が読めなかったりすると，文字を学習に生かすことができず，情報収集がうまくいかなくなり，子どもの学習への意欲を失わせることにもつながります。また，文字がなかなか覚えられなかったり，文字は思い出せるのに思ったように書けなかったりすると，書くことに苦手意識を持ったり書くことを避けたりすることが多くなります。

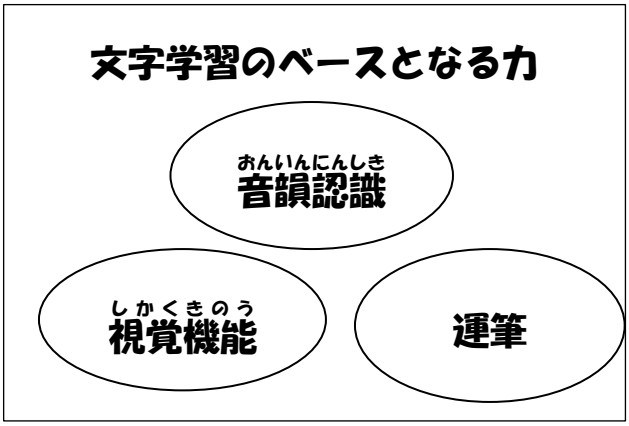
そこで，どの子にも読み書きの基礎となるひらがなを定着させるためには、個々の状況の違いを踏まえた丁寧な指導が必要だと考えます。この冊子「はじめての文字学習」では，通常学級の先生方が文字学習のベースとなる力として必要な「音韻認識の力」「視覚機能の育ち」「運筆の力」が不十分な子が学級にいることを意識しながら，入学当初から授業や家庭学習の中で子どもたちの状況を踏まえ，学校と家庭が連携して，子どもたちにわかりやすく丁寧にひらがなの読み書きを教えるために作成しました。是非ご活用ください。



１　文字学習入門期における丁寧な指導・支援４ステップ

《ステップ 1》音韻認識・視覚機能・運筆の苦手な子どもがいることを意識した指導

ひらがな・カタカナの仮名の読み書きを学ぶには、ベースとして必要な力があります。この冊子では次の３つの力に着目しています。



【音韻認識（おんいんにんしき）】

音韻認識とは，ことばがいくつの音の塊できているか理解する力です。日本語は音節（子音＋母音）が中心です。単語がいくつの音の塊でできているか理解できないと，音と文字を結びつけて理解することができません。

また，音を正しく聞き分けることができないと，音と文字を正しく結びつけることができません。

音韻認識が苦手な子どもが，聞き分けにくく，置換が起こりやすい音の組合せの例を表１に示しました。また，この他に拗音を正しく聞き分けることが難しい子どももいます。

表１　置換が起こりやすい音

置換が起こりやすい音	例
カ行音→タ行音	がっこう→だっこう
サ行音→シャ行音	さかな→しゃかな
サ行音→タ行音	サカナ→タカナ
ラ行音→ダ行音	ラクダ→ダクダ
「シ」と「ヒ」	しち→ひち

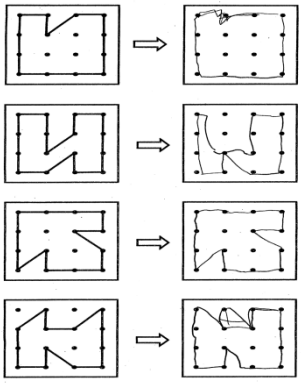
【視覚機能】

視覚機能には，眼球運動・両眼のチームワーク（以後両眼視）・調節機能などの入力機能と脳の中で視覚情報を認知・記憶・イメージする処理機能、眼と身体を協調させる出力機能があります。

（１）眼球運動が苦手だと

- 形が似た文字を間違えやすい
- 文章の助詞や語尾，単語の切れ目を読み間違う
- 読み飛ばしや読んでいる行が飛んでしまう
- 板書を写すのに苦労する
- 捜し物が見つけられない
- 定規や分度器の目盛りがうまく読めない

図１　眼球運動が苦手な子の点図形模写



（２）両眼視が苦手だと

- 遠近感がとりにくい
- 球技が苦手
- 図形問題が苦手
- 立体的な絵を描くことが苦手

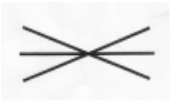
（３）調節機能が苦手だと

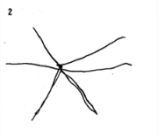
・近くの物を見続けると疲れる
・見る作業を続けると集中力が続かない
・見る作業を続けると頭痛がする
・目をよくこする

（４）処理機能が苦手だと

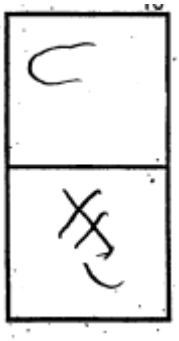
・鏡字を書く
・字の形が取りにくい
・漢字を覚えにくい
・図形・絵の形が取りにくい
・ダンスで左右を間違う

図２　処理機能が苦手な子どもの図形模写





鏡字の例

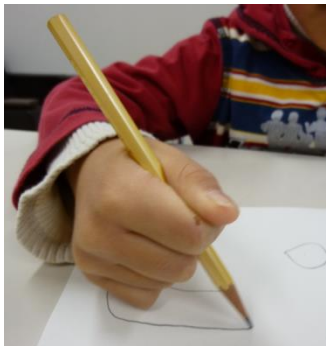


【運筆】

（１）鉛筆の持ち方

ほとんどの子どもたちは小学校入学前から、鉛筆を使用して文字を書く活動を経験しています。しかし，自己流の持ち方をしているため，入学時には鉛筆の持ち方に悪い癖が身についてしまっている子どももいます。鉛筆の持ち方は、姿勢や字形等様々なことに影響するため、望ましい持ち方（P8 参照）を指導していく必要があります。

親指が重なっている持ち方



手首を巻き込んでいる持ち方

（２）目と手の協応

目と手の協応は，前庭覚と関係しています。前庭覚とは重力・直線・回転の３つの加速度を感じ取り、その情報によって体のバランスを調整する感覚です。筋肉の緊張状態を調節するほか、さまざまな働きがある前庭覚が働くことによって姿勢の軸が整い、眼球運動も調整され視覚機能も整いやすくなります。

（３）手指の力・手指をコントロールする力

手指の力加減や動きをコントロールするためには，筋肉 と関節の動きを感知する固有感覚（運動覚・位置覚・重量覚・抵抗覚）の育ちが大切になります。

※前庭覚・固有感覚について詳細は P23（16）参照

入学当初の子どもたちが無理なく文字学習に取り組めるためには、学級担任が

〇音韻認識・視覚機能・運筆が苦手な子どもたちがいるという事を意識する。
〇文字学習に必要な音韻認識・視覚機能・運筆の力について意識して指導する。

ということが必要になります。入学当初，音韻認識・視覚機能の面で十分発達していない子どもや，運筆が苦手な子どもも、授業の中で視覚化・言語化・動作化等の多感覚を用いた指導やルールを明確にした指導を行うことで、全体指導の中でも正しく身につきやすくなります。また，体育の授業や日常生活の中で身体全体の機能や視覚機能を伸ばす活動に積極的に取り組んで行くことも大切です。

《ステップ２》定着していない部分に対する学級全体での復習・再指導

子どもたちが授業で初めて学ぶことは，授業の １ 回だけの指導ではなかなか定着しません。その後の授業や家庭学習において，今まで学んできたことの復習を繰り返し行うことが大切になります。

また、子どもたちのひらがなの習得状況について，ひらがなの学習が完全に終了していない段階から計画的に把握しておくことは，子どもたちの定着が不十分な部分に対して，担任による再指導や家庭学習による復習の機会を設けることにつながります。

学んである内容の聴写課題(読み上げられた文字やことば・文章を書き取る課題)を実施することで短時間に子どもの習得状況をつかむことができます。また、夏休み前に、清音の読み書きの習得状況を家庭で保護者と確認することで，夏休み中に習得不十分の部分を復習する機会を家庭で取るようお願いしたり，学校でも補習等を実施したりすることができます。

そして，２ 学期末には特殊音節の習得状況を確認できる聴写課題を実施し、習得不十分と確認した要素について定着するように，復習や再指導の機会を学校・家庭が連携して取り組むことで，１ 学年のうちにひらがなの読み書きを無理なく習得できます。時には，家庭でも聴写の宿題や初見の読み宿題で実施することで短時間に子どもの習得状況をつかむことができます。読み書き状況把握ツールで習得不十分と確認した特殊音節の各要素について定着するように、学級全体で復習の機会を多く取ったりすることに学校と家庭が連携して取り組むことで、仮名文字の読み書きを無理なく習得できます。

《ステップ３》全体指導では定着しない子どもの要因に配慮した個別の支援

全体指導では定着が難しい子どもに対して、読み書き状況把握ツールや日常生活の観察で推測された要因に早期に気づき、配慮をした個別の支援を行う必要があります。休み時間や放課後等の時間に学級担任が個別に関わったり，家庭と連携して家庭学習の中で取り組めるよう教材を提供したり紹介したりすることも有効です。

《ステップ４》

学級担任による個別の支援では十分に読み書きの力が付かない場合は，本人と保護者の同意を得て，通級指導教室や特別支援学級等、取り出しの個別の支援に繋いだりする等、適切な対応を早期に行うことが大切です。

その際，保護者の同意を得るためにはステップ２・３で把握した子どもの読み書きの状況を保護者と共に確認することが役立ちます。

また，更に個別の検査を行い，認知特性も把握し，支援に生かすことも重要です。

ステップ１・ステップ２を丁寧に行うことにより，「通常学級の国語の授業により多くの子どもたちにひらがなの読み書きの理解と定着が進み」，「ステップ ３・ステップ ４ で認知特性の面で本当に個別の支援が必要な子どもが絞り込まれ，より充実した個別支援が可能になる」ことを目指しています。

丁寧な指導

⑴ 丁寧な指導・支援の年間計画
⑵ 望ましい鉛筆の持ち方
⑶ 形の捉えや左右弁別の力を育てる
⑷ 音韻認識を育てることば遊び
⑸ 特殊音節に慣れさせる：促音の指導・拗音の指導・長音の指導
⑹ 繰り返しの取組で確実に身につける
⑺ 学校と家庭が連携して取り組む
⑻ 読み書きできる喜びを支える
⑼ 子どもの状況への気づきと支援

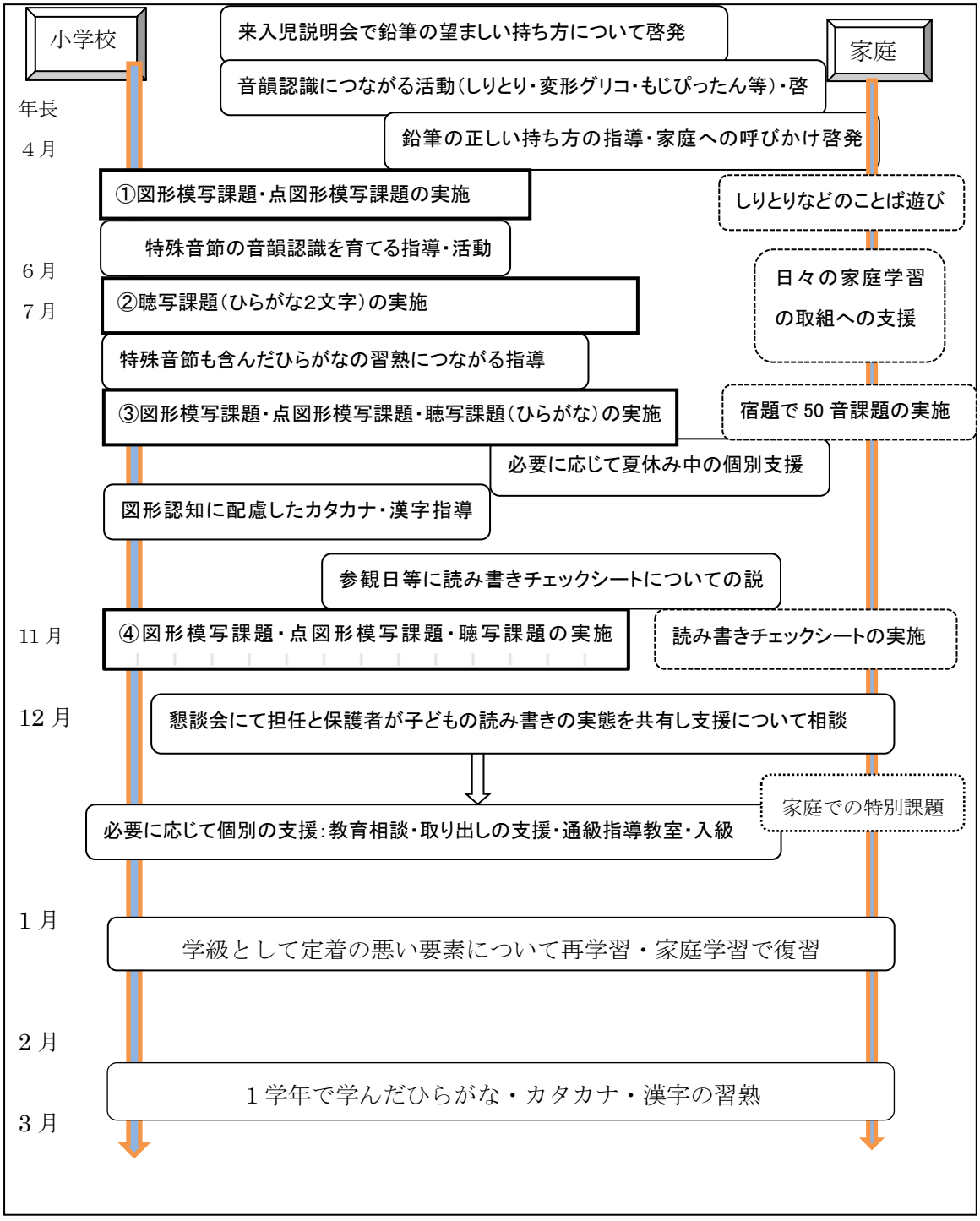
【入学したら，仕切り直し！】
学習にスムーズに取り組めるようになるためには，入学したての時期が大切になります。

入学当初に
・活動への取組方
・鉛筆の持ち方
・「話す・聞く」ルール
について，指導しましょう。

幼稚園児・保育園児は，早くできることだけが良いと思っていることがあります。
しかし文字学習では，ていねいに取り組めることが大切なこともあります。
また，勝手にやることより，指示通りできることが大切なこともあります。
「１年生は，そこが幼稚園児や保育園児と違うんだよ！」と１年生としての誇りを持たせるように教えましょう。

《丁寧な指導・支援の年間計画》

学校で実施する課題　学校での指導・支援　家庭での取組



鉛筆の望ましい持ち方の指導

多くの子どもたちは就学前に既に鉛筆を使った経験があり，中には既に自己流の癖が身についている子どももいます。しかし，鉛筆の持ち方により、可動域が狭くなる・なめらかな線が書きづらい・余計なところに力が入り疲れやすくなる・指が痛くなる・視線を遮り書いている文字が見えない・安定しない・姿勢が悪くなる等の問題が生じます。

入学直後の文字学習入門期に，是非「望ましい持ち方」を指導しましょう。

【三本の指の働き】

親指…「左から右に線を引くのに大事です。」

人差し指…「上から下に向けて線を引くのに大事です。」

中指…「『あ』や『お』のような右から左への払いを書くのに大事です。

※三本の指の働きについて説明すると三本の指できちんと握る大切さを理解しやすい子どももいます。

【 鉛筆の望ましい持ち方の練習方法 】

初めの２週間くらいは、鉛筆を持つ活動のたびに練習しましょう。

鉛筆の芯が右になるように横に置きます。

① はさむ

親指と人差し指で〇を作って，削ってある所の少し上(2.5ｃｍ)を親指と人差し指で軽く挟みます。

② おこす

鉛筆を　くるっと　起こします。

③ つける・つける

小指の横腹を机面に付けます。

鉛筆を人差し指の付け根に付けます。

④ かく

一円玉位の大きさの〇を書きます。

①～④を続けて 10 回位練習してから，文字を書く練習に入ります。

鉛筆の角度は，前から見て 20° 横から見て 60~70° が望ましいと言われています。

「はさむ→おこす→つける・つける→かく」とリズム良く唱えながら練習しましょう！

【声のかけ方】

入学直後，初めて鉛筆を使う日に指導できることが望ましいです。「1 年生らしい鉛筆の持ち方を練習しよう。今までの持ち方と違う人には難しいかもしれないけれど，できるかな？」と 1 年生としてのプライドを持たせるように声をかけながら指導します。今までの癖を変えるのは誰でも大変ですので，何とか直そうと頑張っている間に「よく頑張っているね」と声がけしたり，うまく持ち続けられなくても「癖を変えるのは大変だよね。３週間頑張ろうね。」等の声がけをしたりすることで，癖を直すことに取り組める子どもが増えます。

音韻認識を育てることば遊び

ひらがなの清音・濁音は１文字ー1 音節ー1 拍が対応しているので，文字と音との対応を覚えるとほとんど読むことができます。しかし，一つの言葉がいくつの音の塊でできているかがわからないと，一つ一つの音に分けて理解する事が難しく，音と文字との対応が難しくなります。たとえば，「たいこ」を「た」「い」「こ」のように三つの音に分けることを「音韻認識」といいます。「音韻認識」が正しくできないと文字の学習は難しくなります。

ひらがなの一対一対応のルールから外れるのが，特殊音節です。特殊音節は「きしゃ（拗音：ようおん）２拍」「かっぱ（促音：そくおん）３拍」「おかあさん（長音：ちょうおん）５拍」「とんぼ（撥音：はつおん）３拍」です。促音は「っ」は音はないけれど拍がある。拗音は２文字でも１拍で、音がねじれている。撥音は「ん」は母音がないので聞き分けにくい。等、子どもにとっては理解が難しい課題です。子どもたちに，特殊音節を拍で捉える練習を丁寧に行いましょう。

しりとり

しりとりは，単語を音の塊に分け，語尾の音を意識して，その音を語頭に持つ単語を考えるので、ひらがなを覚えるために大切な音韻認識を楽しく育てられる遊びです。

猛獣狩りに行こう！

♪猛獣狩りに行こうよ
♪猛獣狩りに行こうよ
♪猛獣なんてこわくない
♪だって鉄砲もってるもん
♪槍だってもってるもん
♪あっ!あっ!!あぁ～っ!!!
〇〇〇(←「ゴリラ」等，拍の数の人数でグループを作り，できたら座る)

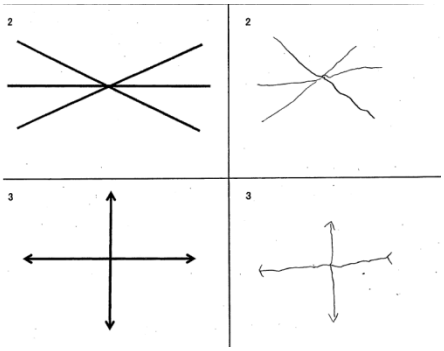
変形グリコ

「グリコ」という遊びの変形です。はじめに「っ」は１拍「ちょ」も１拍というように、特殊音節の拍の数え方に従って遊ぶのが『変形グリコ』です。しりとりをしながら自分の言ったことばの拍の数だけ双六の目を進むことで特殊音節の拍の捉えが進みます。

たぬきことば

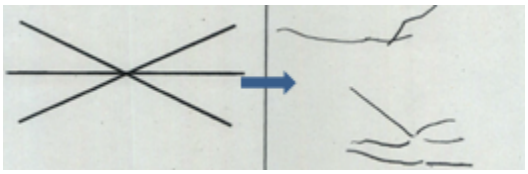
「イタチ」のたぬきことばは？→「イチ」
「たまご」のたぬきことばは？→まご
「かたたたき」のたぬきことばは？→かき
他にも「ま・ぬけ」「り・とる」「ス・トロー」「さ・ぬき」「ふ・とる」様々なバージョンがあります。聞いたことばを一つ一つの音に分けて捉える練習です。

形の捉えが苦手な子どもがいたら!



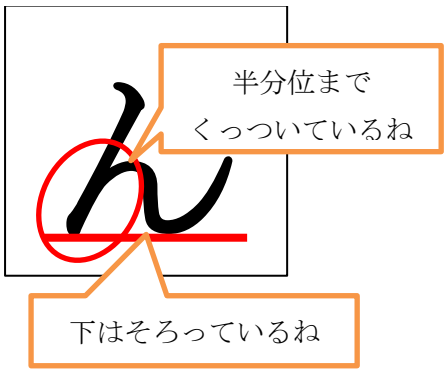
【形の捉えについて】

図形模写課題でうまく形が写せない子どもの中には，モデルの線の向きがうまく捉えられなかったり，線や図形の重なりを合理的に分けて捉えられなかったりするために，どのように書けばよいのか分からなかったりすることもあります。形の捉えが苦手な子どもに対して，ただ同じ字を何回も書き直しをさせても、改善はしません。ただ回数を重ねることにより，ますます字形が乱れることにも繋がります。



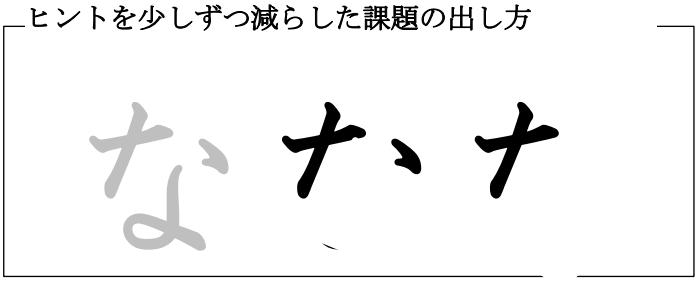
手本をただ見ても，字の形の特徴を捉えられないため，字形を整えて書くことがうまくいきません。例えば，シとツをひらがなと重ねて，指導することで多くの子どもたちには理解が深まりますが，形の捉えが苦手な子どもにとっては，それではまだ不十分で，「シは点を縦にそろえます。ツは点を横にそろえます」と説明して理解できる子どもや，さらに「シは最初の点の下に，２番目の点を打ちます」等，より具体的な言語化が必要な子どももいます。教師の形の捉えのわかりやすい言語化は，とても大切な支援になります。

文字の特徴の言語化



また，形が複雑な文字は，なぞったり，一部分書いてあるところに書き足したりするような課題の出し方で，線の布置に注意して書くことができるようになります。

ヒントを少しずつ減らした課題の出し方



眼球運動が苦手な子ども

【眼球運動とは】

〇ゆっくりでなめらかな視線移動（活動性眼球運動）

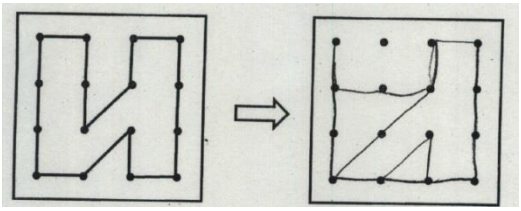
〇素早くジャンプする視線移動（衝動性眼球運動）

〇両眼のチームワーク（輻輳・開散運動）

【眼球運動について】

図形模写課題ではあまり問題が認められないのに，点図形模写課題で形がうまく写せない子どもの中に眼球運動がうまくいっていない子どもがいます。これは，今まで見ていた点がどれか見失ってしまうからです。

眼球運動が苦手な子の点図形模写



【眼球運動の観察】

子どもと向かい合って 30～40ｃｍ前で、目の高さで肩幅位に左右、鼻の前 30～40 ㎝上下に、指等をゆっくり動かし目で追わせてみましょう。両方の黒目の動きを観察してみましょう。

【眼球運動の観察の観点】

✧　顔全体を動かすことはありませんでしたか

✧　黒目でスムーズに追えましたか

✧　黒目が戻る・揺れる等はありませんでしたか

✧　動きにくい方向はありませんでしたか

✧　初めはできたけれど，途中からうまくいかない　ことはありませんでしたか

✧　両方の黒目の位置がずれていませんでしたか

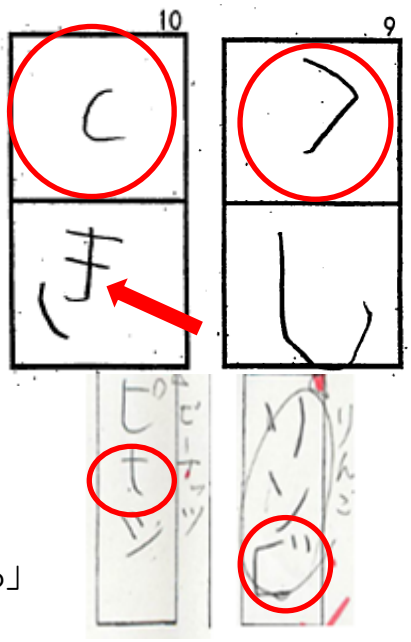
黒目がスムーズに動かなかったり，戻ってしまったり，片目しか動かなかったりする場合は，眼球運動トレーニングが有効な場合があります。

※目に異常を感じる場合は、まず眼科医を受診してみましょう。

左右弁別

【左右弁別について】

子どもたちの中には見本を見ても，上下や左右を判別することが難しい子どもがいます。鏡文字を書く子どもや本来斜めに書くべき斜め線を立てて書く子どもの中には，左右の判別をすることが難しいことが多いです。また，ひらがなではあまり見受けられなくても，漢字を書くと上下の混乱がある子どももいます。



【左右弁別が苦手だと】

左右の弁別が瞬時に正しくできないと，文字学習だけでなく，他の教科の苦手さにも繋がります。

左右弁別が苦手な子どもは，文字学習の時だけでなく例えば「靴を左右逆に履く」「ダンスや体操で左右が逆になる」など他の場面でも見受けられても，そのままにされがちです。

また，算数では「十の位と一の位を迷い，数の大小が瞬時に理解できない」「数直線やグラフの理解が難しい」「小数点の移動が難しい」，英語では「ｂ－ｄ―ｐ－ｑ」が瞬時には判別できず，読むことが困難になる」，図工美術で「斜め線の向きがうまく描き表せず，奥行きのある絵を描くことが苦手」等の困り感を持つことがあります。ある教科でこのような状況が見られたときには，他の場面でも見られないか確認したり，「左右弁別が苦手かもしれない」ことを考慮して支援をしましょう。

動作模倣や矢印体操や「～の右(左)側は？」等の取組も左右弁別を促すのに有効です。

【利き手を固定する】

左右弁別が苦手な子どもの中には，利き手が定まっていない子どもがいます。

利き手が定まっていない場合は，まず利き手を決め，必ず利き手のみで鉛筆を持つようにしましょう。利き手を固定しないと，「線や傾きの向きを，身体の中心線から内側か外側か」で把握しているので混乱することに繋がります。主の動作をする利き手の動きだけでなく補助動作をする手の置く位置と働きもきちんと教えましょう。

また，利き手が曖昧な子どもはリストバンド等をして目で見てどちらの手で鉛筆を持つのかわかりやすくしましょう。

促音の指導

【促音はなぜ難しいのか】

日記や作文で「っ」が抜けてしまう子どもが中学生や高校生にもいます。促音の「っ」は「1 文字 1 音節 1 拍」のひらがなの原則から外れる特殊音節です。例えば「ねっこ」は文字数は３文字、音節数は２、拍数は３となります。しかも、「っ」は声に出して読まないので、拍の感覚が苦手な子どもには、とても難しい課題となります。拍を確かめながらの丁寧な指導が必要になります。

【促音の指導法①～動作化～】

子どもたちに指導する時には、手をたたいて拍を確かめながら指導をすることが理解に役立ちます。

例えば、

「ねこ」は何回手をたたきますか？→「2 回です。」

それでは「ねっこ」は何回手をたたきますか？→「3 回です」

そうです。３回ですね。でも、小さい「っ」の所は、読みませんね。読まないところに「っ」を書きます。読まないので、手のたたき方も変えましょう。

と，「っ」の部分は音が鳴らないようにたたき分けて指導しましょう。

【促音の指導法②～視覚化～】

牛乳のフタとおはじきを使ってことばを唱えながら「っ」の入る場所をみつけます。手をたたきながら確かめる方法と基本的には同じですが、ことばを言い終わっても目の前に入る場所が視覚的に残っているので、子どもたちには理解しやすい方法です。

が　っ　こ　う

か　け　っ　こ

【低学年の指導が大切】

促音等の特殊音節は音韻認識が苦手な子どもには難しい課題ですが、小学校１・２年のうちに身につけておかないと、特別に指導をしないと高学年や中学性・高校生になっても身につきません。拍を確かめながら促音が正しく表記できるようになるまで、楽しみながら慣れるようにしましょう。特に拗促音（例ちょっぴり）は難しいので、自信が付くまで動作化や視覚化を用いて、自分で確かめながら書こうとする姿勢を支えていきましょう。

拗音の指導

【拗音はなぜ難しいのか】

拗音は「１文字１音節１拍」のひらがなの原則から外れる特殊音節で、子どもたちにとって理解が難しい課題です。例えば「おちゃ」は３文字２音節２拍です。指導されるときに促音は小さい「っ」には拍があり、「ゃ」「ゅ」「ょ」単独には拍がないという違いを明確に説明されることがないので、中には「なんか違うのにどうして？」と不思議に感じている子どももいます。また、ねじれた音といわれる拗音の聞き分けが苦手な子どももいます。拗音と促音は同じ小さい文字でも違うものであるということを子どもにわかりやすく説明することで、理解しやすくなります。

【拗音の指導①～拍について～】

「おもちや」は何回手をたたきますか？→4 回です。
そうですね。手をたたく回数を拍と数えます。だから４拍です。
「おもちゃ」は何拍ですか？→3 拍です。
小さい「っ」は１文字で１拍ですが「ちゃ」「ちゅ」「ちょ」
や「しゃ」「しゅ」「しょ」は２文字ですが拍は１拍です。
例えば「はっぱ」は３文字で３拍ですが，「おちゃ」や「きしゃ」は
３文字ですが２拍です。また，ちゃ」「ちゅ」「ちょ」や「しゃ」「しゅ」
「しょ」はねじれた音なので、手もひねってたたきましょう。

【拗音の指導～ゃゅょを迷ったら～】

50 音表を見せながら，音を伸ばす

「や～」　「何の音が残った？」→「あ」
「ゆ～」　「何の音が残った？」→「う」
「よ～」　「何の音が残った？」→「お」

「きゃ～」　「何の音が残った？」→「あ」
「きゅ～」　「何の音が残った？」→「う」
「きょ～」　「何の音が残った？」→「お」

迷ったら音を伸ばしてみよう！

【拗音の指導③～聞き分けの練習～】

〇どっち？どれ？シートを使って

①「きゃ」はどれ？「きゅ」はどれ？等と同じ行の拗音単独の聞き分けする。

②「きゃべつ」はどれ？「きゅうり」はどれ？と、同じ行の拗音の含まれることばの中から拗音を聞き分ける。

③「きゃ」「しゃ」「ちゃ」など違う行の拗音単独や拗音の含まれたことばの中からを拗音を聞き分ける。

長音の指導

長音は特殊音節の中でも子どもたちには理解が難しい音韻です。たとえば「おばさん」と「おばあさん」では、表記上は「あ」の文字があるので違いはわかりますが、拍の感覚が弱いと聞いただけでは「おばさん」と「おばあさん」が聞き分けられない子どもがいます。また、どこまでが「ば」［ｂａ］の［ａ］で、どこからが「あ」の［ａ］なのかが、連続していて聞き分けることができないため、拍の打ち方を右図のように続けて打つ方法もあります。

また、長音の表記方法の原則と例外について曖昧に指導されると、基本的な長音の表記の原則も理解が難しくなります。原則をきちんと定着させてから、例外を指導しましょう。

長音の表記の原則

長音は「ア列」・「イ列」・「ウ列」・「エ列」・「オ列」があります。
ア列は「あ」で表記　例「おかあさん」「おばあさん」
イ列は「い」で表記　例「おにいさん」「おじいさん」
ウ列は「う」で表記　例「ゆうやけ」「すうじ」
エ列の漢語は「い」で表記　例「せい(背)」「とけい」「ていねい」
オ列の原則は「う」で表記　例「おとうさん」「おとうと」

「エ」列の和語は「え」で表記

「おねえさん」
「ねえねえ」
「ええ」

「オ」列の例外

オ列の長音の例外は、歴史的仮名遣いでオ列の仮名に「ほ」又は「を」が続くものであって、オ列の長音として発音されるものです。
「おおかみ・こおり・こおろぎ・ほお・とおい・おおい・とおる・ほおづき」などがあります。

例外を画用紙に書いて教室の壁に貼っておき、折に触れみんなで確認する機会を取りましょう。

「森のくまさん」「大きなうた」の替え歌で「お」の列の例外を覚えよう！

♪とおくの(とおくの)
♪おおきな(おおきな)
♪こおりの(こおりの)
♪うえを(うえを)
♪おおくの(おおくの)
♪おおかみ(おおかみ)
♪とおずつ（とおずつ）
♪とおった（とおった）

小文字は「大きなうた」の時！

学習内容の定着のために！

文字入門期の指導は、「音韻認識に苦手さがある子どもに聞き分けや聞き取りができるようにし、文字を書くことに結びつけていくこと」「自己流で身につけてきた子どもの書きを正しく書けるように学び直す」等、子どもにとってやっかいな内容に取り組むことになります。そのためには、しっかり身につけるまで繰り返して復習する事が大切です。

【文字学習には順番がある】

ひらがな・カタカナ・漢字全ての文字学習の定着のためには，「聞く」「話す」「読む」「書く」の順番を守ることが必要です。

たとえば「だ」と「ら」が正しく聞き取れないと「だ」と「ら」を正しく書き分けることはできません。また，読めない文字を何回も書く練習をしても，それは記号を書く作業になり，音と文字を結びつける学習になりません。

【集中できる時間を把握する】

文字を覚えるためには，たくさん書いて練習すれば良いと言うものではありません。１年生の集中できる時間は短いです。集中できる時間の中で収まる量を集中して取り組むことが大切です。集中できる時間は子どもによって違います。子どもの集中できる時間に課題を区切って取り組ませることが，理解を深めることに結びつきます。

【記憶研究から】

人の記憶は３プロセスあります。

（１）記銘：覚えること

（２）保持：覚えたことを維持していくこと

（３）想起：覚えたことを思い出す（再生）

人の忘却は急速で，１日たつと記憶の保持は半分以下になってしまいます。

また、同じ時間学習するなら、一日にする集中学習と時間間隔を開けて行う分散学習では，分散学習の方が効果的です。一日にたくさん練習するより，毎日少しずつ練習した方が記憶に残りやすいのです。

学校と家庭の連携

学習内容の定着のためには，学校での授業だけでなく学んだことをその日のうちに家庭でも復習する事が大切です。特に特殊音節については，学校での指導時間だけでは定着が難しい子どももいます。学級の子どもたちの定着が不十分な部分は，家庭学習で補充プリント等を実施し，学校と家庭との連携した取組で定着を促しましょう。

【必要な支援に早く結びつけるために】

子どもの読み書きの状況を，担任だけでなく保護者にも知っていただくためにも，家庭学習の中で保護者に子どもの読み書きの状況を知っていただく機会を計画的に設けましょう。

清音の指導が終わった時期には，ひらがな 46 文字の読みと書きの状況を家庭で把握できる課題(50 音読み書きチェックシート等)を実施し，清音の定着が不十分な場合は，夏休み前に保護者と懇談等する機会を設け，夏休み中に家庭で宿題の他の補充をする機会を取ってもらったり，学校で補充する機会を設けたりし，夏休み中に定着できるような連携をすることが効果的です（Ｐ18 参照）。

【初見の読み】

初めての文章の読み(初見の読み)は，学校生活の中ではなかなか実態の把握は難しいです。しかし，初見の読みは国語以外の教科書の読みや文章問題を解くときに大変重要になります。毎日音読の宿題を出している場合もあると思いますが，時には算数の文章題の読み等「初見の読みの課題」を出すのも大切です。

【初見の読み課題の保護者アンケート例】

今日の音読の宿題は算数の文章題です。

〇お子さんの読みの状況はいかがでしたか？　《各問の読みにかかった時間　　秒》

①スラスラ読んだ。　②少しつかえながら読んだ。

③語尾や助詞などを代えて読むことがあった。　④行や単語を飛ばして読むことがあった。

⑤単語の区切りを代えて読むことがあった。　⑥一文字一文字読んでいた。

〇読み終わった後，どのような問題だったかお子さんに自分の言葉で説明させましょう。

①一度読んだだけで内容を説明できた。　②もう一度読み直してから説明した。

③内容は説明できなかった。

〇本日の宿題や普段のお子さんの読みで気になる点がありますか？

保護者配布資料

夏休みに取り組んでみましょう！

50 音読み書きチェックシートを実施し，お子さんの現在のひらがな清音の読み書きの習得状況について把握できたでしょうか？1 年生は 4 月生まれから 3 月生まれと，発達にも開きがあります。また入学前から文字の読み書きを好んでしていた子どももいれば，全く文字への関心を持たないまま入学した子どももいます。

1 学期末の段階で清音の読み書きがしっかり身についていない場合，できるだけ苦手意識を持たせず，夏休み中に無理なく学び直すことにより、2 学期以降の学習にスムーズに取り組めることをめざしましょう。そのためには，お家の方と共に楽しんで取り組むことが大切です。

聞こえないと話せない，読めない。読めないと書いても覚えられない。

① 音の聞き分けがうまくできないと，正しく話す・読む・書くことが難しくなります。たとえば，「ら」を「だ」と書き間違えている場合は，「ら」と「だ」と聞き分けることができているかを確かめてみましょう。「らくだ」と聞かせて，真似をさせてみて，「だくだ」または「だくら」になる場合は，うまく聞き分けられていない場合が多いです。うまく聞き分けられていない場合は，「らくだ」〇「だくら」×等，ゆっくり大人が発音して，子どもに正しいか正しくないか〇×を言わせる等，取り組んで聞き分けられるようになってから，「読むこと」「書くこと」の学習に進めていきましょう。50 音書きシートに全て正しく書けていれば，聞き取りは正しくできています。

② 50 音読みチェックシートで読めない文字・読みにくい文字があった場合，どのような文字が読めなかったか確かめてみましょう。たとえば，「さ」と「き」，「わ」と「ね」などのように形が似ている文字を読み違えたり自信が持てない読みになったりするような場合は，眼球運動が原因かもしれません。お子さんの黒目の動きを観察してみましょう。目の 30cm 位前で親がゆっくり上下左右に指を動かし，目で追わせてみましょう。黒目はスムーズに動き，指が止まったら止まれるでしょうか？ 眼球運動がスムーズでないと形が似た字を読み間違ったり，文章を読む時にどこを読んでいたのかわからなくなったりすることがあります。

うまくできないところを指摘するより，少しでもできるように改善したところに気づいてほめるように心掛けましょう。

お子さんにとって苦手な部分に取り組んで行くことになります。「できない」「まちがえた」等，マイナス面を指摘するより，段階を追ってわかりやすく教え，少しの改善に気づき，「できるようになったね」「わかるようになったね」とプラスのことばをかけるよう心掛けましょう。

カードを使って

まず読める文字と読めない文字を確かめて分けましょう。その後，読めない文字のカード 2～3 枚を使って読む練習をします。カードを見せて読めなかったら，じっくり考えさせるより，すぐに答えを教えてあげましょう。一枚一枚のカードに，時間を掛けるとイヤになってしまいます。あまり考えさせず，詰まったら答えを教えながら，サッサとカードをめくって繰り返して読む練習をしましょう。スムーズに読めるようになったら，もう 1 枚読めない文字のカードを加えて，同じように読む練習をすすめていきましょう。

練習の最後に読める文字カード全部に今日練習した文字のカードを加え，スムーズに読めるか確かめてみましょう。

全部スムーズに読めたら「すご～い！読める字増えたね！」とほめましょう。ほめ方次第でお子さんのやる気スイッチが入ります！

カードのめくり方の勢いや速さはお子さんのやる気を引き出すことと繋がってきます。お子さんが読めた時に「ヨシッ！」「そう！」等テンポ良く、プラスの反応をし，読めなかった時は「おしいっ！〇(正しい読み方)」等さらっと進みましょう。

ノートでなくてもOK

ノートに文字を書くことに抵抗がある子どもも，ホワイトボードに文字を書くことは好きなことがあります。要は文字を正しく書けるようになればよいので，子どもが好むホワイトボード・黒板・水書板(筆に水を付けて字を書きます。乾けば消えます)等で楽しく書くことを重視しましょう。

うまく形が取れない文字は途中まで書いてあげ，部分の練習だけすることでうまく形を取るコツがつかめることもあります。

「当てっこ」をしよう！

・背中に書いた字を当てる遊びです。背中にゆっくり 1 画ずつ書き，何という文字が書かれたのか当てます。

互いに書く役・当てる役を交代して楽しみましょう。

当ててもらうために，書き順を意識して書くことに自然に気持ちが向きます。

絵本の時間

・ 読み聞かせを聴きながら

読んでいる場所を指でたどってみせながら，聴かせることで，文字を追いながら読むことができます。

・ 交互読み

一文ずつ，または文節毎に親子で交代しながら読むことで，読みが苦手でも，読む分量を減らす事で抵抗が少なく楽しく読むことができます。

・ 間違い探し

子どもと一緒に絵本を見ながら，親がわざと間違えて、読み間違いを見つけさせると，一生懸命文字を追って聴くことができます。

読み書きができる喜びを支える

文字学習の経験が少なかった子どもは，文字学習に難しさを感じながらも，「文字の読み書きができるようになった」という喜びも大きいこともあります。読み書きができるようになったという喜びが，その後の学習を支えることにも繋がります。大人のちょっとした配慮で「読み書きができるようになった」という喜びを支えていきましょう。

【大人のちょっとした配慮例】

読み書きに苦手意識がある子どもに対しては，特に少しの上達に気づいて褒める機会を多く取りましょう。読めないこと書けないことを注意したり叱ったりすると，余計苦手意識を強めてしまします。少しの伸びに大人が気づいて具体的に褒めるように心掛けましょう。「昨日読めなかった〇と〇が読めるようになったね」「この前は書けなかった〇が今日は形良く書けるようになったね」等，ポジティブで具体的な言葉がけをすることでやる気が生まれます。

日常生活の中で文字を読めて良かったと感じられる体験を多くさせましょう。「もらった手紙を読む」「好きな絵本を読む」「絵本を誰かに読み聞かせてあげる」「カルタの読み札を読む」「ゲーム等の遊び方や作り方の説明を読む」等，子どもにとって必要感のある読む活動を意図的に体験させましょう。読めない文字はあまり悩む時間を置かず，早めに教えてあげましょう。読みがスムーズでない場合は，文節毎大人と交互に読む等，抵抗を減らしてあげましょう。

日常生活の中で文字を書きたいと思える活動を多く取り入れましょう。「招待状を書く」「お礼状を書く」「大切な人へ手紙を書く」等の「自分の気持ちを伝えるために書く」活動や「持ち物のメモ」「材料のメモ」「作り方のメモ」等「必要感のあるメモを書く」活動を意図的に体験させましょう。

大切な人に丁寧に書く活動は，下書き等を事前にしておき，丁寧に書くことに集中できるよう配慮しましょう。また，手紙等を「受け取った人の喜びを伝える一言」がその後の書こうという気持ちを高めることに繋がります。

子どもの読み書きの状況への気づきと支援　参考文献

【音韻認識について学ぶための参考文献】

①　特別支援教育における言語・コミュニケーション・読み書きに困難がある子どもの理解と支援
～シリーズきこえとことばの発達と支援～
大伴潔／編著　大井学／編著　　学苑社

【アセスメントや指導・支援用の参考文献】

②　小学生の読み書きスクリーニング検査
発達性読み書き障害（発達性ｄｙｓｌｅｘｉａ）検出のために
宇野彰／著　春原則子／著　金子真人／著　Ｔａｅｋｏ　Ｎ．Ｗｙｄｅｌｌ／著
インテルナ出版

③　特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン　わかりやすい診断手順と支援の実際
特異的発達障害の臨床診断と治療指針作成に関する研究チーム／編集　稲垣真澄／編集代表
診断と治療社

④　多層指導モデル（MIM）読みのアセスメント・指導パッケージ
海津亜希子編／著
学研

⑤　アセスメントから始める国語 読解力を育む発達支援教材
小池敏英監修　学研

⑥　ＬＤ児のためのひらがな・漢字支援　個別支援に生かす書字教材
小池敏英・雲井未歓・霧島勤　編／著
あいり出版

【トレーニング用の参考文献】

⑦　読み書きが苦手な子どもへの〈基礎〉トレーニングワーク
竹田契一監修　村井敏広・中尾和人／著　　明治図書出版

⑧　読み書きが苦手な子どもへの〈つまずき〉支援ワーク
竹田契一監修　村井敏広／著　明治図書出版

⑥　knock knock　学習支援ドリルシリーズ　スリーヒントなぞなぞ&なぞなぞづくりⅠ・　Ⅱ
文字のまちがいさがし
大阪医科大学 LD センター/アットスクール 教育研究部　共同開発
開発総指揮　栗本奈緒子・水田めくみ・竹下盛
監修　竹田契一・里見恵子・西岡有香

子どもの視覚機能等の状況への気づきと支援 参考文献

【初めてビジョントレーニングを学ぶための参考文献】

① 学ぶことが大好きになるビジョントレーニング ～読み書き・運動が苦手なのには理由があった～
北出勝也／著 図書文化社

② 「見る」ことは「理解する」こと ～子どもの視覚機能の発達とトレーニング～
本多和子／著 北出勝也／著 山洋社

【アセスメントや協調運動関係の参考文献】

③ 学習につまずく子どもの見る力 ～視力がよいのに見る力が弱い原因とその支援～
玉井浩/監修 奥村智人・編集 若宮英司/編著 明治図書出版

④ 教室・家庭でできる「見る力」サポート＆トレーニング ～ 発達障害の子どもたちのために～
奥村智人／著 中央法規出版

⑤ 絶対子どもが伸びる魔法のビジョントレーニング ～遊びながら集中力がつく！目と体の運動～
内藤貴雄／著 日刊スポーツ社

⑥ 発達障害のある子どもの視覚認知トレーニング
本多和子／著
学研教育出版

【トレーニング用の参考文献】

⑦ knock knock 視覚発達支援ドリルシリーズ 点つなぎⅠ・ Ⅱ
大阪医科大学 LD センター/アットスクール 教育研究部 共同開発
開発総指揮 奥村智人、監修 竹田契一・川端秀仁

⑧ ひとりでとっくんシリーズ ２５ こぐまツートンパズル
３０ みぎ・ひだり
こぐま会 幼児教育実践研究所

⑨ 思考力算数練習帳シリーズ シリーズ１３ 点描写
M. ａｃｃｅｓｓ／編集者 発行 株式会社認知工学

〔参考文献〕

(1) 竹田契一監修　村井敏広・中尾和人著（2010)「読み書きが苦手な子どもへの〈基礎〉トレーニングワーク」

(2) 竹田契一監修　村井敏広著（2010)「読み書きが苦手な子どもへの〈つまずき〉支援ワーク」

(3) 海津亜希子編著(2009)　「通常学級における学習につまずきのある子どもへの多層指導モデル（MIM）開発に関する研究」

(4) 海津亜希子編著（2010)　「多層指導モデル（MIM）読みのアセスメント・指導パッケージ」

(5) 小池敏英・雲井未歓喜・窪島　務編著（2003)「LD児のためのひらがな・漢字支援」

(6) Beery　VMI

(7) 堀内澄恵(2011)　「視覚機能についてのアセスメントと支援のあり方について～眼球運動検査・WISC-Ⅲでの観察の観点と視覚機能検査～」

(8) 文部科学省　「現代仮名遣い内閣告示第一号」

(9) 野口法子(2009)　「音韻意識に困難を持つ発達性読み書き障害児の指導方法に関する研究」

(10) 樋口咲子著「どうする姿勢・執筆－筆記用具を正しいで姿勢で正しく持って適切に動かすー」

(11) 押木 秀樹 近藤 聖子 橋本 愛(2003)　「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」

(12) 小野次朗　上野一彦　藤田継道編（2007)　「よくわかる発達障害」

(13) 竹田契一　花熊　暁　熊谷恵子責任編集（2012)「特別支援教育の理論と実践」Ⅱ　指導

(14) 加藤義信編　（2008)「資料で分かる　認知発達心理学　入門」

(15) 小池俊英・雲井未歓・窪島　務編著（2003)　「ＬＤ児のためのひらがな・漢字支援」

(16) 木村順監修（2011)「発達障害の子の読み書き遊びコミュニケーション遊び」